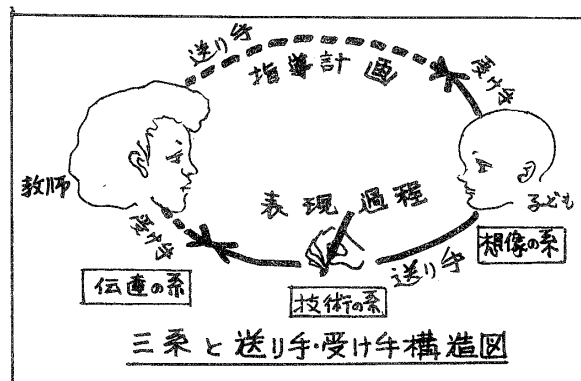


造形表現過程の三系論 く伝達の系における送り手と受け手の構造

十文字学園女子短期大学
林 健造



1. 前年度研究発表の要約

昭和50年度第28回本学会大会において、「造形表現過程の三系論」の概要について発表した。

三系論とは、造形の表現過程（教師側からは指導過程）を三つの重要な系に分類し、一つは頭を中心とした想像の系、二つは、手を中心とした技術の系、三つは、心を中心とした伝達と系を考えた。それぞれの系の働きや、役割を明確にすることによって、指導の要否を明らかにし、かつ、指導のねらいにあった効果的な指導形態の多角性を論述したものである。

なお、少しくその内容にふれてみよう。

A. 想像の系

「人は作る前にそのものの形をイメージとして描くことができる。人はイメージによって行動する動物である」という特徴があるが、すべての造形活動は、蓄積された記憶（先行経験）を素材として、これらを単独に、あるいはいくつかを組み合わせてのことによって新しいイメージを作りだし、これを出発点としてそのもの化（表現化）していくものである。

このイメージを表現化しようとする行動の起爆力は感情である。描く、作る仕事への行動意図はここで決まることから、指導面においてもきわめて大切な点である。

B. 技術の系

イメージをもの化する系で、内容としては、①シンタックス（構文法）。②技法。③材料用具の扱い方が考えられる。

フィッシャーのいう「体験を捕捉してそれを記憶に、記憶を表現に、素材を形式に変形する……」場であり、想像の系が主として育てていくところに対し、技術の系は、いわゆる教えることのできる場所である。

C. 伝達の系（畧）

2. 伝達の系における送り手と受け手の構造

本論文は、三系論のうち伝達の系を中心に、送り手・受け手の構造を考察し、指導の要否を明確にすることをねらいとしている。

① 表現とは伝達である

「子どもの絵は心の表現であり、ことばである」といわれる。これは一つには、絵はNON VERBAL COMMUNICATION（視覚伝達）の手段であること、一つには表現そのものが伝達を含むことで表出と区別されることを意味している。

H. Red は、この表現の伝達の本質を「他人からの反応を求めている申込み」「自発的に外部の世界へ差し伸べた触角として使用する」と説明し、乾寿は、美は伝えの文脈の中にとらえ、送り手が受け手をくぐることによってわかるを獲得する」とその構造を述べている。

②. 送り手としての子ども、受け手としての教師

子どもの絵や製作は、上述のように自分の感情や知覚を頭の中にとどめておらずに外に色や形を使って表わす送り手のことばである。

したがって受け手としての教師は、この作品をみるだけではなく、「読みとる」という行為によってのみのおもしろい伝達の受け手の役割を果たすことになる。逆に何を描いたのときよく不用意な発言は、その意味で伝達の脈を断つことになる。

③ 送り手としての教師、受け手としての子ども

一方教師からの伝達経路は、いわゆる指導計画であり、指導のねらいを決め、教材を選択し、準備をひとえ、いかに導入するかの工夫をこらすことを基にした指導内容を送り手として子どもに伝達する過程である。

指導以前の指導（の監視や）場あたり指導が効果的でないといわれるのはこの過程の重要性を教えたことばである。この過程もまた、教師のイメージと技術（指導技術）と伝達の三系を通過することになる。子どもは導入により、教師の伝達意図がわかり、興味と関心をいだくことにより、表現意欲をわかすという受け手としての働きを通り、表現過程に入るという円環構造をとると考えられる。